

ISSN 0910—2396

野鳥だより

—北海道—

第 106 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成 8 年 12 月 21 日

ヒヨドリの渡り



マスイチ浜（室蘭） H 3. 10. 26 撮影者 三 船 喜 克

〒 006 札幌市手稲区前田 7 条 7 丁目

2 - 9



もくじ

マダラチュウヒ	佐藤ひろみ (写真撮影 渋谷信六)	2
珍鳥三題		3
秋、コムケ湖畔探鳥雑記	井上 公雄	4
このごろ感じていること	百武 充	8
中国トキ保護支援基金にご協力を	柳沢 信雄	9
中国トキ保護支援基金		10
探鳥会報告		10
探鳥会案内		13
鳥民だより		13

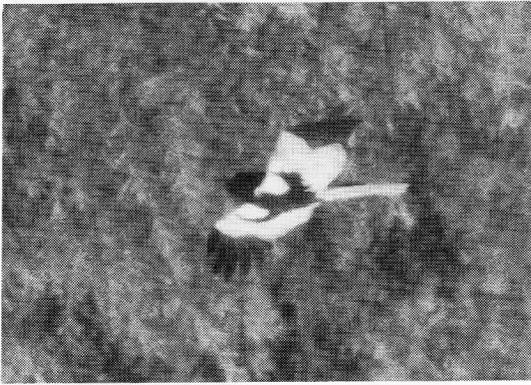
マダラチュウヒの飛来

佐藤ひろみ

写真撮影 渋谷信六 ('96. 8.17)

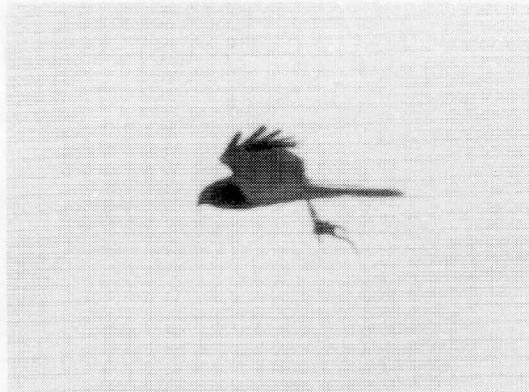
マダラチュウヒは日本ではごく稀な迷鳥ですが、1996年8月10日から8月18日にかけて、石狩川流域（札幌市北区篠路町及び当別町）において雄成鳥1羽を観察したので報告します。

当地は低いヤナギがまばらに生える灌木帯、牧草地、アシ原などが隣接する所で、ホオアカ、オオジュリン、ノビタキなどの草原の鳥が多数生息しています。そしてシマアオジも灌木帯にわずかに観察できます。その囀りに魅了されてから、生息地・渡りなど謎の多いその鳥の、せめて終認記録を取ろうと毎週のように通っていましたところ、8月10日の夕方、1羽の鳥影がよぎり、直観的に「マダラだ!!」と思ったのも束の間、すぐに見失ってしまいました。しばらく捜したのですが、なかなかみつきりません。渡りの途中だったのかもしれない…と思いました。念のため翌日も観察し、午後4時30分ごろによくやく姿を見つけました。



低空をゆっくり巡回している様子は遠目に見ると、白が目立ちカモメのようです。この石狩川に沿ってウミネコなどがよく飛んでいますが、よいカモフラージュになり思ったほど人目につきません。エサの探索飛行中は、チュウヒ同様、地表から数メートルの低空を飛翔していますが、チュウヒが羽ばたきと浅いV字形の滑翔を繰り返すのに対し、このマダラチュウヒはチュウヒと比べると翼の幅が狭いためか、羽ばたきが多く滑翔はごく少ないようでした。また観察中にはホバリングはしませんでした。

エサは見晴らしの良い牧草地へ運んで食べたり、草の繁みの中にそのまま押さえこんだりしているようでした。エサを運ぶとき、足にはカエルやカナヘビが握られていました。小鳥を襲ったが、失敗した場面もあったとの事です。夕方、2時間連続して観察したところ、3回エサを食べ、食後すぐには飛び立たず、5～15分の休息をとりました。カエルは引きちぎって食べていました。



終日、観察することはできませんでしたが、早朝または夕方の比較的活発に動くと思われる時間を選びました。

午前6時から3時間30分ほど枯れ草の上に止まっていることもあり、意外に休憩の時間が長いものだと思います。止まっている時は雨覆の一部と下腹部が白いものの、頭・胸、背の黒色部が大部分を占め、遠目にはカラスのようで、意外と目立たないというのが実感です。たんだ翼と尾はほぼ同じ長さでした。光線の加減で、黒一色の頭部が顔盤状になっているのがよくわかりました。また、虹彩は黄色、嘴は黒、その基部はわずかに黄色でした。足は黄色で細長い感があります。羽づくろいの時、

腰は白い羽毛に細かい横じまがあり、直接頭かきをしました。

エサの探索飛行中に、2羽のチュウヒが複数回現れましたが、互いに干渉しませんでした。これら2羽のチュウヒは、一方は翼前端や胸の白い個体で、また他方は縦斑が多いタイプで腰が白いものの、翼上面の暗灰褐色の錨形模様や風切の黒と青灰色の横帯がなく、翼の幅は広く、また柵に止まって風でバランスをくずした時にパーと広げた尾羽のすべてには横じまもなかったので、マダラチュウヒ♀ではないと考えました。また♂はエサを自ら食べ、巣に運ぶと思われる動きはなかったので当地での繁殖はないと考えました。

8月18日は、枯れ草の上で長く休んだ後、空高く飛び去り午前10時03分に見失ったので、あわや渡去かと思いました。19、20、21日と捜しましたが、果してその姿を見ておりません。

個体数こそ少ないものの、発見されれば見誤ることはないであろう、このマダラチュウヒ。この後、日本のどこかで観察され、渡りのルートとして連続性ができればと期待しています。

マダラチュウヒは文献によると、20数例の記録があるのみで北海道での観察例はまだありません。東南アジアで越冬し、アムール川流域や朝鮮半島北部などで繁殖す

るということですが、北海道と同緯度の沿海州には個体数が多いという私信もあり、再びの飛来を期待したいものです。



最後に、マダラチュウヒの確認、または写真提供して下さいました羽田恭子さん、渋谷信六氏・渋谷弘子さん、暖かく見守って下さった方々に感謝申し上げます。

参考文献：図鑑「日本のワシタカ類」「鳥630図鑑」
Strix1994, vol. 13

〒062 札幌市豊平区平岸4条2丁目3-15. A205
編集部註) Birder96年12月号誌上にて、新城氏・泉氏が95年5月に観察した個体はマダラチュウヒ雌と確認されました。

珍鳥三題

— 編集子のスクラップより —

北海道新聞からのスクラップである。残念ながら前二例には確認された年月日が記載されていない。

キマユホオジロ

旅鳥としてまれに西日本に飛来するキマユホオジロが檜山管内上ノ国町で道内で初めて確認された。

キマユホオジロは上ノ国町早川の天然林内で行われたかすみ網による公開バンディング調査で捕獲された。

調査を行ったのは渡島管内森町の橋本英樹さん。

体長約15cm、雌の若鳥で、頭上のくっきりとした黒線と黄色いまゆが特徴。

道バンダー連絡会の三浦二郎会長は「これまでも道内に渡ってきた可能性はあるが、報告は今回が初めて。シベリアから南方に向う途中、ルートを外れて迷い込んだと考えられる」と話している。

オガワコマドリ

留萌管内羽幌町焼尻島では、国内標識調査では戦後18羽しか確認されていない珍鳥オガワコマドリが見つかった。

焼尻島で見つかったオガワコマドリは羽幌町職員の有田智彦さんが山階鳥類研究所の標識調査のため張ったか

すみ網にかかった。

ネックレスのような胸の青と赤のリング模様が特徴の美しい鳥。冬にインド、南アジア、夏にシベリアに渡る鳥で、日本には迷って来るらしい。

道内では1983年、現在の釧路市博物館が鶴ヶ岱公園から春湖台へ移転する際、戸棚の裏に迷い込んでミイラ化したとみられるオスが見つかっている。



ワキアカツグミ再来

1995年2月に札幌で確認されて以来道内2例目。10月30日午前6時半ごろ、苫小牧市西部の森林で渡り鳥生態調査中の同市の鳥類標識調査者佐田正行さんが捕獲した。同じ大形ツグミ類のマミチャジナイと一緒に捕獲されたことから、この群れと行動していたと推測される。羽の状態から生後1年未満とみられ、栄養状態は良好だった。

秋、コムケ湖畔探鳥雑記

井上公雄

シギチ(シギ、チドリ類)の面白さや不思議な魅力を知ったのは鶴川へ行く様になって間もなくのこと、シギチを見るのならコムケ湖が良いと聞かされコムケ湖の存在を知ったのである。コムケ湖の話を目にしてからはコムケ湖のことが頭から離れず、行ったこともないコムケ湖を想像して何回も夢を見たものである。

1988年9月下旬当時探鳥行動を共にすることの多かった羽田さん、大野、堀内(青森在住)竹内各氏と私の5名で願望叶い初めて1泊2日の予定でコムケ湖へ向った。札幌から車で約5時間余りで国道からコムケ湖へ向かう農道へ入り、間もなく待望のコムケ湖が見えて来た。海岸手前に堤防を思わせる砂丘(砂州)が連なり農道を挟んで西側にヨシ原に囲まれたコムケ中沼、共和橋付近は浅瀬らしく、早速30羽程のオオソリハシシギとオグロシギ、そして4羽のツルシギのお出迎えに感激する。東側はサンゴソウの紅い絨毯の湿地が連なる水路、共和橋付近から見渡す水路地帯にはメダイチドリ、トウネン、ダイゼン、アオアシシギ等が群れ集まり、時折りさっと飛び立ち水面すれすれの超低空飛行で急反転旋回を繰り返した元の場所へ着地する行動を反復していた。

共和橋を渡り右折すると左側がオホーツク海岸の砂浜が続き波打ち際には6~7羽のトウネンが寄せ返す波と戯れるような素早い走りが可愛らしい。砂州の道を少し行くと奥まった小沼が見えて来た。此処に車を停める。

小沼の南西方向は疎林が点在する放牧地へ続き、紅いサンゴソウの絨毯に縁取られた湿地干潟が湖面を囲む平面的な風景である。手前は中沼へ連なる水路になり、中間辺りに倒れた牧柵とバラ線が目印のオンネコムカイ川河口(と言っても小さい水溜まり)があり、まばらなヨシ原の浅瀬干潟へと続く。

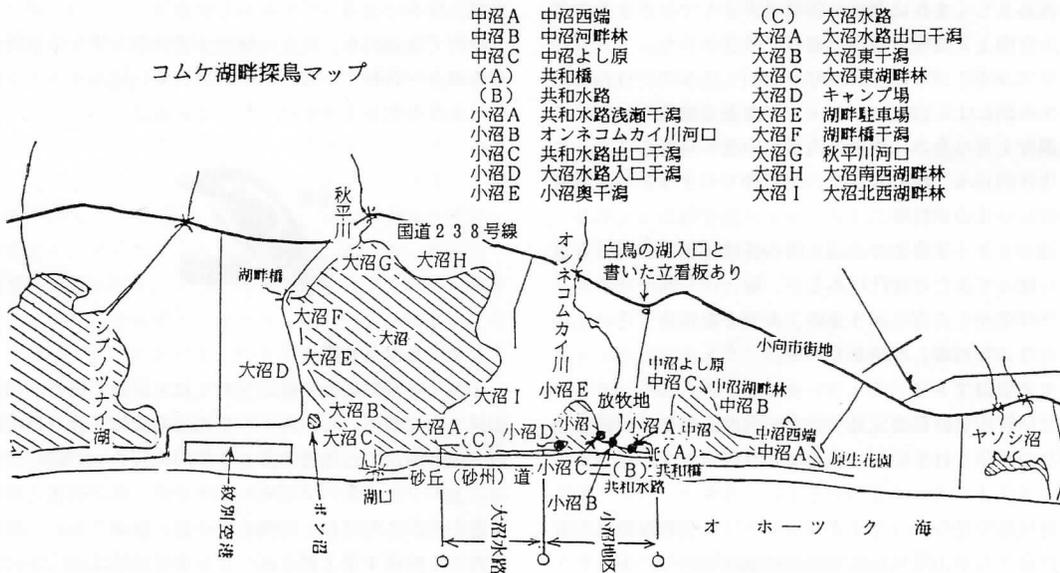
車を停めた地点から湖岸までは緩らかな傾斜地で小沼の全景を見渡すことが出来る。奥深い小沼E(以下探鳥マップ参照)ではオオソリハシシギ、オグロシギ、アオアシシギ等の存在はスコープでは確認出来るが、小型のトウネン、メダイチドリ等の小型種の存在判別は無理である。小沼C一带にはトウネン、メダイチドリ、ハマシギ、ダイゼン、アオアシシギ、オグロシギ等大小6~70羽程度のシギチが集まっていた。

夢にまで見たコムケ湖のシギチの群れが、目の前の湿地干潟に右往左往している現実に、念願叶った嬉しさと噂通りの賑わいに感激興奮する私を、周囲の人達の目にはどう映ったのだろうか。

小沼Eには等間隔に整列した20羽余りのアオサギも見事、その中に幸運にも白さの目立つコウノトリが1羽静かに行動しているのも見られ、大沼Iの高木にはオオタカの成鳥もと、次々と注目の的が現れる。

この小沼地区では大小40~100羽程のシギチの群れが小沼A~Eの各ポイントの往來を繰り返し、状況に応じ

コムケ湖畔探鳥マップ



て場所を変えながらの観察が続けられた。

暫くして羽田さんが大沼シブノツナイ湖方面を案内して下さることになり、移動中海岸側でホウロクシギの若鳥を見る。南東方向に大沼があり水路で小沼と連なっていること、大沼は広く大沼A～Gまで半円を描くように広い干潟湿地と沢山の観察ポイント、整備の整ったキャンプ場、駐車場等があることも解った。

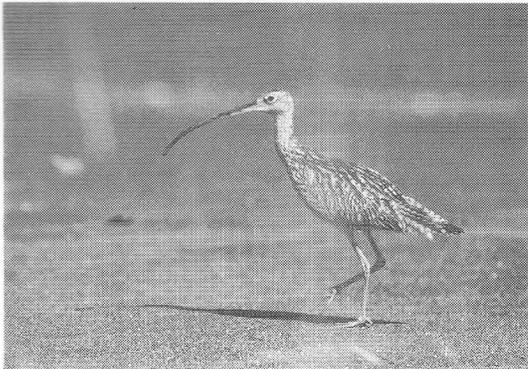
広い干潟の所々にトウネン、ダイゼン、アオアシシギ等が3～5～20羽程が散在しているのも見られた。

更に空港前を過ぎると林と原野、この辺りはノゴマ、シマアオジ、ホオアカ等の夏鳥の絶好の環境と見受けた。

やがてシブノツナイ湖が見えて来た。車の気配を感じるや忽ち慌てて飛び立ち奥の方へ遠ざかって行く、優に千羽を越えるカモ類の群れ、コムケ湖のカモとは人に反応する警戒心が違う。コムケ湖は保護区、ここは狩猟区過敏なまでの警戒心も無理はない。

ここには干潟はなくシギチは殆ど着かないらしい。海岸へ出て見ると多数の流倒木端や塵貝殻が散乱する中に立派な成鳥のホウロクシギが1羽、先程の若鳥とは嘴の長さが明らかに違う。波打ち際には8～9羽のトウネンに混じり初めてヘラシギを見た。

こうしてコムケ湖及びその周辺の地理と概要を知ることが出来た。大沼の各ポイントを確かめ小沼地区へ戻り日没まで観察を続け、この日一日の記録を整理すると次の通りになった、トウネン80±、メダイチドリ60±、オオソリハシシギ35±、ハマシギ30±、アオアシシギ6、ダイゼン5、チュウシヤクシギ4、ツルシギ、コオバシギ各3、ホウロクシギ2、ウズラシギ、ヘラシギ、キリアイ各1、他シギチ合計17種、その他の主なものはアオサギ多数、コウノトリ、オオタカ、チゴハヤブサ、チュウヒ、ヒシクイ13、タヒバリ3、他31種であった。



ホウロクシギ

翌朝は夜半の好天に乗じて渡つたらしく、メダイチドリは60が50に、トウネンは80が15に、ハマシギは30が10に、オオソリハシシギは35が23に減少し、ダイゼンは5

が10に、ツルシギは3が11に、アオアシシギは8が20に、キョウジョシギは0が5に増え、アカアシヒレアシギも加わって17種が18種にと変わり観察した範囲で比較するとーが126、+が41、±=-85という結果になった。

このことから彼らは好天の夜半を利用して渡りをするものと見られ、一夜の数と種類の変化を見ることで渡りの一面を識ることが出来る。

初めてのコムケ湖行きは、沢山のシギチとの出会いの楽しさと、自然環境に恵まれたコムケ湖での新たな発見を秘めた不思議な魅力に惹かれ、翌秋のシーズンが待ち遠しく感じられ、鳥仲間の中でもコムケ湖の話題が交わされ次第に広まって行った。

'89年は9月中旬に2泊3日、下旬に1泊2日と2週連続でコムケ湖へ出掛けた。中旬の往路紋別市街地へ入る頃からハリオアマツバメ、アマツバメのかなり密度の濃い群れに遭遇、上空一杯に練り広げられる乱舞は絶え間なく、コムケ湖に着いても未だ続いていた。恐らく万単位の大群で、種類を問わずこれ程の大群に出会ったのも初めてであった。

昨年の感激と興奮を思い浮べながら一年振りに訪れコムケ湖、昨年は大勢の人達が集まった観察の中心である小沼地区に学生風の二人組が岸辺に座り込んでいる外、車も人影も見られない。

それもその筈小沼A～Eにはシギチの動きは全くなく昨年の賑わいが嘘のようだ。と思う間もなく10数羽のシギが飛んできた。オオソリハシシギとオグロシギが各2羽にツルシギが13羽挨拶代わりに現れた。

暫くすると大沼方面の様子を見て来たという羽田さん大野さんに出会った。一回りして見たが今日は良くないとのこと、やがて佐藤(彰)、渋谷両ご夫妻も加わった。何れもコムケ湖の魅力に取り憑かれた会員仲間である。その後加わった少数のトウネンにオバシギ、コオバシギ、小沼Bの牧柵バラ線からダイビングを繰り返すカワセミを楽しむ中に日没を迎えた。

明日の好天を約束するかの様な素晴らしい夕焼けを眺めながら、少ないシギチもこの分なら今夜の中に渡って行ってしまいそうな予感がする。

前日に続き好天の暖い2日目の朝を迎えた。中沼A Cの岸辺のヨシ原付近には、今日も2羽のダイサギの優雅な姿、至る所にアオサギ、カモ類と静かな湖面風景である。昨夕日没まで小沼地区にいた少数のシギチは予想通り渡って行ったものか姿はなく、何となく拍子抜けした感じがする。間もなく旭川から堀内さん(現在青森在住)が到着、昨年ここで一緒に楽しんで以来一年振りの再会であった。海上も海岸も念入りに探して見たがこんな時に限ってめぼしいものは何一つない。大沼方面の広い干潟にもシギチの姿はなく、結局コムケ湖には小沼地区

に僅かのシギチ以外シギチはいないことが判った。

こんな時だからと午後からサロマ湖龍宮台へ出掛けひと時の観光気分を楽しみ小沼へ戻った。

小沼Dにはアオアシシギ15±、ツルシギ13、オバシギ、コオバシギに30羽余りのトウネンに混じりウズラシギも1羽とすっかり活気を取り戻していたのは予想外の変化で、今日はじめての群れの観察になり、出現度も少ない少数派のウズラシギは注目的、薄暗くなるまで頑張る気分を良くして宿へ引き揚げた。

3日目、昨夜遅く勤めを終え札幌から駆けつけた3名を加え会員仲間17名が同じ宿に泊まった。

その多勢の期待も空しくこの朝の小沼地区にはシギチは1羽も見られず、海海岸にもめぼしいものも見当たらないところから大沼方面へ行って見ることにした。

途中、海岸の砂浜に40羽程のトウネンとメダイチドリの集団に冬羽のムナグロ2羽が見られた。

大沼Eには少数のトウネンと2羽のチュウシャクシギが見られたことで干潟へ降りてみた。地面は砂質で意外に固く歩き易い、大沼Fへ飛んだシギチを追って干潟を歩く、小指程の細長い無数の巻き貝の這った跡が網目模様になり数の多さを物語っている。

シギチの餌になったのだろうか小さな二枚貝の貝殻も一面に散らばっていた。

大沼F辺りまで移動した時、大沼G付近の対岸のかけろうの中にシギチの群れらしいのが動いているのが見られ、その群れを確認するため浅瀬を直線に歩き始めた。

数cmから十数cmの遠浅が河口近くまで続き、秋平川が湖に流れ込む深みに行く先を阻まれた。

何処までも続く遠浅は砂地で固く少しも濁らない。進むに連れ沖へ向かって沢山の小魚が素早く逃げる。綺麗な水にすぐにも「わかめサラダ」にして食卓に上げられそうなわかめ？が所々に漂い、ある距離になるとアオサギが次々に飛び立ち沖へ移動する。

かけろうの中に見られた群れは40羽程のアオアシシギの群れであることが判った。来る途中海岸で見たトウネン、メダイチドリの40羽程の群れ以外は今日唯一のシギチの群れが此処に集まっていたのである。振り返って見ると道路の車が豆粒の様に見える。干潟から遠浅を2km以上シギチの着く位置を大勢の仲間たちと語りながらの歩みはとても快く楽しい体験になった。

湖畔橋の土手に戻ると山田良造さん、佐藤幸典さん夫妻に出会った。20人余りの会員グループの集まりに驚き、まるで会の探鳥会みたいだと言いながら記念写真を撮ったものである。湖畔橋付近の林からは沢山のベニマシコの鳴き声が聞かれ、一本の樹に10羽以上留まって居るところも見られた。その他ノゴマ、オオジュリン、ノビタキ、カワラヒワ、アオバト等が出ていつの間にか山野の探鳥に趣が変り、朝の落胆も何処へやら誰もが心の高まりを感じながら小沼地区へ戻った。

しかし残念なことに小沼の状況は少しも変わらず、中沼のダイサギを見ながら昼食を済ませ3日間の探鳥を終え各自の家路へついた。

89年9月23～24日、先週に続いて2週連続今回は1泊2日の予定で志田さんご夫妻の車にお世話になり泉さんも同行私と4人で出掛けた。

先週の3日間はさすがのコムケ湖もシギチの出現にばらつきが見られ、コムケ湖としては不振の3日間であっただけにそのことが気掛かりであった。

コムケ湖に着くと小沼Cにはトウネン、ハマシギ、ダイゼンその他40羽程が着いていた。小沼D付近にもダイゼン、アオアシシギ、オオソリハシシギ等15～6羽今日はハマシギの割合が多い、トウネンに混じってメダイチドリも少数、先週同様オバシギ、ダイゼン、アオアシシギ、オオソリハシシギ、その中に冬羽に替わったムナグロも1羽、そしてヒバリシギも、いつの間にかオグロシギも仲間入りしていた。



小沼A～Eの各ポイントの往來を繰り返していたシギチも次第に小沼Dへ集まるようになり観察の中心がそちらへ移った。大沼方面の状況も知りたいので行って見る。

先週も大沼Fのアオアシシギの群れ以外は大沼の広い干潟にもシギチの姿は少なかったが今日も殆ど見られない。

シブノツナイ湖付近の海岸でメダイチドリが4羽と閑しい状況であることが分かり、再び小沼へ引き返すと会員の福岡さんが来ていた。結局この日はシギチ11種、60羽程でこの日の観察は終わった。

翌日は快晴無風冷え込みの厳しい朝であった。寒さしのぎに雨合羽を着る、大沼Eの地上には成鳥1、幼鳥3羽のオジロワシが留まっていた。

目当てのシギチの種類数は前日と変わらないが数は増え活発な動きを見せていた。今日も大沼へ行って見る。

大沼Bにシギチの一群が見られたので、背丈を越える葦や雑草をかき分け干潟へ向かう。物音を驚き小鳥が飛び出し雑草や灌木の枝に冬羽に衣替えたノビタキ、オオジュリンにベニマシコ、カワラヒワ等が渡りの群れになり戯れていた。

干潟に出るといた筈のシギチは沖の生簀の浮材の上にカモメに混じりハマシギ、オグロシギ、オオソリハシギに仲間外れのアオアシシギが1羽狭い居場所を巡り争いらしき行動、多少遠いがスコープで浮材の上シギの長い脚までシギを丸ごと見ているところへピューピューイと鳴き声が近づいて来た。4羽のキアシシギがよし原のかけからイソシギの様に尾を振り、警戒心もなく数mまで近づき次第に遠ざかって行った。カメラを向けるには光角明るさ距離とも申し分ない条件であった。再び小沼へ戻る。シギチの様子に変わりは見られない。

帰り支度を考えなければ時間になった。最後に中沼のダイサギを見ようと共和橋の畔へ行くと、思いがけなく中沼側の浅瀬にツルシギが17羽、今回初めて見たツルシギの群れであった。ダイサギも1羽中沼Bのよし原付近にいた。もう心残りはないシギチを中心に色々な鳥との絶え間ない出会いに充実感に満ちた1泊2日であった。

90年9月15～16日(祝、日)

晴天続きが非情にも朝から細い雨が降り出し全道的に雨の一日との予報、それを承知で約束予定通り竹内さんは羽田さんを乗せ迎えに来てくれた。

道中も雨でコムケ湖畔の駐車場に着く、早速雨で見通しの悪い干潟にチュウシャクシギとダイゼンらしいものが見られた。車中で空模様をうかがいながら食事を済ませた後傘を差しスコープを大沼Fに向ける、チュウシャクシギの群れにホウロクシギが3羽、嘴の色が淡紅色がかり曲がりも少なく全身の羽色が明るく感じるところから若鳥ではないかとのこと、その中に連休で予定していた会員が次々と集まり総勢16名になった。

小沼へ移動しようとしているとき40羽程のチュウシャクシギの群れが湖上を南へ向かって飛んで行った。

小沼Dではトウネンの群れに混じって少数のハマシギとダイゼン、アオアシシギ、ツルシギ、オオソリハシギ等が30羽余り、湖岸に降りたが雨が激しく双眼鏡もスコープも心配になる。雨は益々激しくなりこれ以上の観察は無理と判断、今日は諦めることにした。羽田さん、竹内さんのカウントに依るとトウネンが92±とのこと、沢山のシギチを前にホテルに引き揚げた。

翌日雨は夜半に上がり秋晴れの朝であった。先ず小沼へ行く、昨日あれほど居たシギチが明らかに少なくなっていた。小沼A～Eの各ポイントを往來するのはハマシギ10±、ダイゼンが4～5羽の他アオアシシギ、ツルシギ、オグロシギ、オオソリハシギ等約20羽程、中に1羽のキリアイが人気の的になり、小沼Bではカワセミのダイビングが繰り返されていた。

海上ではウミガラスかハシブトウミガラスかと話題になったが遠いのと潜水時間が長く判別は難しく何れかの幼鳥ではとの結論になった。

今日も大沼を見に行く、湖口付近の干潟にトウネンが30羽とアオアシシギ、ツルシギ、ダイゼンがいた。

更に大沼Bにアオアシシギとツルシギも見られたので近付こうとすると飛び立ち、湖上を飛び回った後何がお気に召したかアオアシシギが14羽に、ツルシギが2羽近くに着地、暫く付き合った後大沼Fへ飛び去った。

その後これ等と付き合うように延々と続く干潟浅瀬を昨年同様大沼Gまでシギチになった気持ちで歩いた。

その間14羽のオオソリハシギ、4羽のツルシギ、14羽のアオアシシギ、ユリカモメ、アジサシの中を進み、秋平川が流れ込む深みに遮られ引き返した。

小沼へ戻ると小沼Dにはダイゼンが10羽程にオオソリハシギ、アオアシシギ、ツルシギ、オバシギ等が30±にトウネンが30羽程集まっていた。

1日目は沢山のシギチを前に激しい雨に阻まれ充分な観察は出来なかったが、2日目は小沼大沼とも良い観察が出来た中、ヘラシギ、ウズラシギ、ヒバリシギ等との出会いがなかったことに少々物足りなさを感じたのはおごりだろうか。

2日間の主な記録はトウネン92±、オオソリハシギ40±、ダイゼン20±、アオアシシギ17±、ツルシギ、オグロシギ各11±、オバシギ、タシギ各6、コオバシギ5、ホウロクシギ3、キリアイ1、その他シギチ合計13種、シギチ以外の主なものはウミガラスSP、アジサシ、カワセミ、ベニマシコ等、昨年の不振を帳消しにする様にまとまったシギチの群れに出会った。これだから次に期待してコムケは止められなくなってしまふ。

〒062 札幌市豊平区西岡1条7丁目1-14

このごろ感じていること

会員・財日本鳥類保護連盟 百 武 充

北海道を離れてからもう20年以上になります。転勤をくりかえした公務員生活も数年前に終わり、いま埼玉県に一応落ち着いています。いまの私は送られてくる『野鳥だより』にざっと目を通すだけの会員に過ぎません。北海道の土を踏むこともめったになく、探鳥会の参加者のお名前を見ても、知っている方はもうチラホラという感じでしか目に留まりません。本当に、不活発な1会員に過ぎませんが、会の創設に多少とも関係した者として、北海道に10年間住んだ記憶をたいせつに持ち続け、日本における北海道の地位になおロマンを感じているものです。

北海道野鳥愛護会が歩んだ25年、4分の1世紀という時間は、決して短いものではありません。会がそれだけの年月に耐えたというのは、まことに貴重で、意味のあることと思います。

会が創設された1970年は、公害の激化や、山岳地への観光道路建設などの自然破壊に反対する世論が、かつてない高まりを見せた時代でありました。それは、1970年の公害国会に続く1971年の環境庁の設置へと至って一つの頂点に達し、1973年の第1次オイルショックで急速に下降してしまう潮流だったのですが、愛護会もその潮流をとらえた人たちの努力によって生まれ、参加した多くの会員によって育てられてきたわけですね。

ただ、この会は、この時代に生まれた多くのNGOとは異なり、北海道庁の主導によって創設され、また、特定の対象に向けての運動を行う団体ではありませんでした。それは、ものたりないところはあったにしても、そのためにいろいろな人を幅広く集めることができ、時を越えて続いていくことができた面がおそらくあるでしょう。

私はここ数年、環境教育に少し関わる機会をもってきました。そしていろいろな活動に加わったり見たりして感じたことは、どんな活動を行うにせよ、なんのために活動するのかという目標を持つことのたいせつさでした。鳥を見る人たちが少なかった時代に生まれた野鳥愛護会の活動が、初期には直接保護に関わる活動よりも、鳥の世界のおもしろさを紹介しようという目標を設定したのは、やむを得ないことであり、正しかったと思います。ただ、25年たって、そこからどれだけ前進できたかを、どのように評価したものか、私には多少のとまどいがあります。

いま、市民活動はかつての対立型から提案型の時代に

なった、ともいわれます。一般には、それは運動の成熟を示すものとして理解されています。しかし、例えば、最近の『世界』（1996年11月号）の環境特集にもあるように、問題はまだまだたくさん起こっているのです。身近な自然環境から地球規模の問題まで、鳥をはじめとする小さな生きものと人類がともに健康に生きていける世界を、21世紀に向けてどう作っていくのか、私たちはまだ答えを持たず、いまのような危機的状況にあるかという自覚さえ、十分ではありません。

北海道の野鳥についても、エトピリカやウミガラスなどの海鳥をはじめ、シマアオジやエゾライチョウの減少が、遠く離れたところにいる私の耳にも届いてきます。それらの原因のかなりの部分は、おそらく北海道そのものの変貌とは関係のないところにあるのでしょうか。しかし、エゾライチョウの減少の原因を道外に求めることができるでしょうか。また、シマフクロウについていえば、巣箱や給餌事業によって巣立ったヒナが生き続けられる環境を維持するには、どうしたらよいのでしょうか。北海道が養えるタンチョウの個体数はどれくらいなのでしょう。藻岩山や野幌森林公園のような都市近郊の自然をいつまでも健康な姿で残すことができるのでしょうか。会員を増やし、より大きな力になるには、どうしたらよいのでしょうか。愛護会として、このような問題にどのように取り組んだらよいのか、どのような活動目標を持つべきなのか、中心にたつ方々はそれぞれ考えをお持ちとは思いますが、もう少し誌面で議論があってもよいような気がします。

政治風土が総保守化に向かい、若い人たちの社会的関心の欠如がいつそう進みそうな風潮の中で、市民運動までがもやもやとした微温的な雰囲気呑み込まれてしまうのでなければよいのですが。愛護会も、日常行い慣れた活動に流されることなく、これまでの活動をふりかえり、将来の展望をしっかりと持つ団体であってほしいものです。

愛護会がますます多くの会員を集め、北海道の自然を残すために努力されますよう、会員の一人として心から期待しています。

〒355-03 埼玉県比企郡小川町みどりが丘3-11-14

中国トキ保護支援基金にご協力を

柳 沢 信 雄

1996年8月10日～17日、第1回中国トキ保護観察団に参加して世界でただ1カ所野生トキの生息する中国陝西省の洋県をたずねた。

1981年、日本では野生のまま繁殖の見込みがないと判断し、野生個体全羽(5羽)捕獲し飼育下での繁殖、野生復帰を目指した同じ年に奇しくも中国陝西省秦嶺山脈のふもと洋県の山中で7羽の野生トキが発見された。

あれから15年、日本のトキは環境庁や専門家が中国トキの力を借りながらけんめいの努力を続けたが、結果は失敗に終わろうとしている。

一方、中国のトキは着実に繁殖し82羽にまで増えている。

日本の飼育下人工繁殖は失敗で、中国の野生状態自然繁殖が成功したと判断すべきなのか、たしかめたい気持ちもあった。

観察団に参加し現地で見聞する情報は意外であった。

私たちがこれまで新聞やテレビから受けとっていたトキのニュースは極めて微量でしかも部分的な片寄せた情報であったことに気づかされた。

中国側のトキ保護に日本の政府や専門家の協力、資金援助が大きな役割を果たしていることを知らされたのである。

1981年の中国トキ発見より、トキ保護に関する双方の専門家や事務当局は協議を開始し、1985年に東京でトキ保護増殖に係る日中協力基本合意がなされた。

同年秋、中国のトキ「ホワホワ(華華)♂」を借りて佐渡トキ保護センターで日本のトキ「キン」とのペアリングが試みられたことは新聞やテレビで大きく報道されていた。

しかし、中国でのトキ保護事業に対してJICAによる機材供与、専門家の交流(派遣及び受け入れ)。日本側民間団体の募金による協力が総額で7,000万円余りとなり、中国洋県にトキ保護飼育センターが建設されたことなどは情報として私たちに届かなかった。



日本と中国の協力は過去の成果をふまえて第二次(1995～1997年)がスタートしている。

国内のニュースでは中国から借り受けたトキ、ロンロンとフォンフオンのつがい、やがてロンロンが死亡、フォンフオンと日本のミドリノベアリング等は報道されたが中国大陸でトキ絶滅回避の日中協力事業はほとんど報道されていない。

そこで日本側の協力状況について、第二次計画の初年度(1995年)を紹介させてもらう。

環境庁が財団法人日本鳥類保護連盟の協力を得ながら次のような協力をした。

- (1) トキ生息環境保護協力費(環境庁)
913万円-財団法人日本鳥類保護連盟委託
- (2) 中国絶滅危惧 鳥類、トキの保護増殖プロジェクト(鳥類保護連盟)
350万円-経団連自然保護基金助成事業
- (3) 中国、陝西省における野生生物保護のための普及啓発活動(日本鳥類保護連盟)
300万円-環境事業団地球環境基金助成事業

この年の12月、日本鳥類保護連盟は「中国トキ保護支援基金」を創設している。

日本の空から消えたトキを地球上から絶滅させない為に日本の多くの愛鳥家にも協力をお願いしようとはじめて募金である。

1996年10月現在、団体、個人から寄せられた額は約350万円余、今年度は中国側の要請で、餌場の造成やカメラなどの器材購入にあてられる予定だとのことである

中国側の現場では「中国には人はいくらでも居るが、資金と器材はいつも欠乏している」という声も聞かれる。

日本の協力で感謝しながらトキ保護に全身全霊をかたむけている現地関係者に頭のさがる思いで接してきた。

現在の協力が決して充分とはいえないが、一人でも多くの方がこの募金に協力して下さることを願わずにはいられない気持ちです。

連盟の募金は今のところ目標金額、期間の指定はせずできるかぎり長く支援したいと考えているそうなので、連盟の募金依頼文を掲載して会員皆様の協力をお願い致します。



中国トキ保護支援基金

トキを絶滅から救うためみなさんのご支援・ご協力をお願いいたします。

(財)日本鳥類保護連盟

トキは学名をニッポニア・ニッポン (*Nipponia nippon*) といい、その名前のとおり日本を代表する野鳥でした。北は北海道から南は九州まで日本各地に生息し、世界でもアジア大陸東部のロシア・ウスリー地方、中国、朝鮮半島などに分布していました。

トキは水田に生息するカエル、小魚、昆虫などを主食とし、稲作文化中心であった日本人の生活に深く関わり、古くは日本書紀にもその名が登場しています。

現在、トキは中国と日本両国だけにしか生存が確認されていません。日本では佐渡トキ保護センター(新潟県)に飼育されている高齢のメスの「キン」1羽になってしまいました。

また、中国においては野生のもの、飼育されているものを含め約60羽が生息しているのみで、絶滅が心配されています。

野生のトキは、^{せんせい}陝西省・洋県地方に約30羽が生息し、残り約30羽は、洋県のトキ飼養センターと北京動物園で飼育されています。

近年、野生個体が生息する唯一の場所の洋県では、農業による水質の汚染や営巣木の不足、^{かんぼう}旱魃によるエサ不足など、生息していくための環境が徐々に失われ、深刻な問題となっています。中国側でも現地政府や団体が中心となってトキの保護のために努力が続けられていますが、必要な資金や機材が不足しているのが現状です。

こうした状況のもとで、当連盟ではトキという種を絶

滅から守るため、広くみなさまからのご寄付を募っています。ご寄付は、中国に生息・飼育されているトキの調査研究、生息環境の改善、人工飼育施設の拡充のため活用させていただきます。

どうか、近い将来、たくさんのトキが天空を飛翔することに願いをこめ、一人でも多くの方のご支援ならびにご協力をお願いいたします。

【ご寄付の方法について】

①銀行振込みの場合

東京三菱銀行新宿支店 普通口座1229652

(財)日本鳥類保護連盟 中国トキ保護支援基金

②現金書留の場合

〒160 東京都新宿区新宿2-5-5

新宿土地建物第11ビル5F

(財)日本鳥類保護連盟 中国トキ保護支援基金

※寄付金は、税金の控除の対象になります。ご寄付いただきました場合、当連盟より免税証明書を発行いたします。なお、誠に恐縮ですが、銀行へのお振込みの場合は、募金していただいた方の名前だけしかわかりませんので、あらかじめ住所、氏名、電話番号をご連絡のうえ、ご送金くださいますようお願いいたします。

【お問い合わせ先】

財団法人日本鳥類保護連盟 中国トキ保護支援基金

担当：杉本、豊田

Tel 03-3225-3590 Fax 03-3225-3593

(註) 本項は「私たちの自然」1996.4 No.413より転載しました。



鶴川探鳥会のことなど

8.8.25

樋口孝城

快晴です。牧場。牛の群れ、馬の群れは草を食み、アキアカネ、ノシメトンボが飛びかっています。北海道のささやかな夏もまもなくおしまいです。シギ・チドリ渡りの季節、鶴川河口はちょっと一服の彼らであふれているかもしれません。

さあ、河口です。どんなシギ・チドリが来ているでしょうか。

いません。何もいません。もっと先に行ってみましょう。チラッと何かが見えました。イソシギ? スコープの列、待つこと長時、やっとでましたトウネン3羽。ちょっと早めですがお昼にしましょう。青空、さわやかな風、牛馬の落とし物を見ながら食べるおにぎりの味は最高です。

「いませんねえ」、「そうですねえ」、「どうしたのでしょうかねえ」、苦笑まじりの会話。日頃の心がけのいい人ばかりが来ても、こういうことがあります。皆さん良く知っているようです。鳥とはこういうものであることを。きのうはたくさんいたかもしれません。明日は山ほど来るかもしれません。鳥は私たちのカレンダーを知りません。鳥には鳥の生活があります。

その鳥の生活が、いま人間の手によって侵されつつあります。いや、もう既にかなり侵されてきております。

このわずか10年の間にも、鳥が住めなくなってしまった場所がたくさんあります。渡り鳥の繁殖地、越冬地はどうでしょうか。渡り鳥の飛来状況は、北海道、日本の自然環境のみならず、地球規模の自然環境の変化と密接に関係しております。10年後の鶴川河口はどうなっているでしょうか。どんな鳥が来ているでしょうか。

「いませんねえ」、「そうですねえ」、「やっぱりだめですねえ」、寂しそうな会話。これだけは想像したくありません。

最近、北海道の鳥研究・探鳥の先達による書物や、ずっと以前の探鳥会の記録などに目を通してあります。鳥たちの生息・飛来状況の過去と現在を知り、そこから未来をのぞみ、人間と鳥との共存、人間と自然とのかかわりを考えようとしております。とりあえずは、次の鶴川探鳥会にはお揃いで出迎えるよう、図鑑のシギ・チドリたちに語りかけているところです。

〒002 札幌市北区拓北5条2丁目10～17

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、トビ、チュウヒ、ハイトカ、スズガモ、ウミアイサ、イソシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、キジバト、アオバト、カワセミ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ノビタキ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ドバト 以上26種

【参加者】鈴木倫太郎・みどり・那央・森太郎・岳二郎、今泉秀吉、北山政人、鷺田善幸、樋口孝城・陽子、藤原浩一・はるみ、石橋和子、中正憲信・弘子、山田良造、森 茂太・純子・林太郎、羽田恭子、板田孝弘、道場 優、戸津高保・以知子、渋谷信六・弘子、小堀煌治、森田新一郎、柳沢信雄、佐藤幸典、永島良郎・トキ江、栗林宏三、野坂英三、大西、井上公雄 以上36名

【担当幹事】井上公雄、永島良郎

鶴 川 8. 9. 8 記 録

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、トビ、チュウヒ、カルガモ、イソシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、キジバト、アオバト、カワセミ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、モズ、ノビタキ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ドバト、シギSP 以上25種

【参加者】上田邦彦・寛子、首藤 徹、香川 稔、板田孝弘、広瀬洋子、樋口孝城・陽子、古川一幸・さとみ、犬飼 弘、竹中昭雄、山田良造、富川 徹、奥寺 亨、田子元樹、小田嶋恵子、鷺田善幸、長谷川稔、野坂英三、霜村耕介、今泉秀吉、成澤里美、井上公雄 以上25名

【担当幹事】富川 徹、井上公雄

野幌森林公園 8. 10. 20 記 録

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、ヒドリガモ、コガモ、マガモ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ミソサザイ、ルリビタキ、ツグミ、ウグイス、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、カケス 以上26種

【参加者】山下和子、後藤義民、蓮実恒生、久田伸一、柳沢信雄・千代子、深田由美子、栗林宏三、森あかね、佐々木裕・政子、森 茂太・純子・林太郎、今村三枝子、真壁スズ子、岡田 実・江里、樋口孝城・陽子、道場 優、戸津高保・以知子、山田良造、野坂英三、大西裕子、須田 節、霜村耕介、吉田慶子、船越昭則、井上公雄 以上31名

【担当幹事】道場 優、井上公雄

宮島沼・鏡沼探鳥会 8. 10. 13 板 田 孝 弘

10月の定例探鳥会、宮島沼・鏡沼は秋の渡り鳥ガン・カモ類やハクチョウが南下するときの中継地になっていると聞いている。さすが北海道の秋、快晴—澄みきった空。近くの山や森、丘陵の紅葉は今ひとつ早いようだ。

早々に家を出て宮島沼に到着したときは早くも会員の方々スコープでお目当ての鳥たちを探索中で、私より熱心な愛鳥家がおられる。

当日は会員数十名と、そのほかの愛鳥家や観光の方々で沼の水辺がまたたく間に一杯になる。

湖面には次から次とマガンの編隊が到着、その数の多いことにぼう然となる。この日、ガン・カモ類の現地調査をされている方（編集者註・草野先生）の説明によると、マガンは約2万羽が来ており、さらに増えるとのことであった。今日は快晴なので多くの編隊が湖面に舞い降りるとのこと。



話には聞いていたが、目前にその姿を見た感動は一瞬呼吸が止まりそうであった。

リーダーより「11時40分に次の鏡沼に移動します。」との伝達があった。

しかし、このマガンの大群のなかに飛来数が少ないシジュウカラガンとカリガネが混ざっているという。それらを探すのに皆さんはスコープや双眼鏡で群れのなかを見ている。なかなか見つからない。誰かが早く見つけ歓声をあげる。私はなかなか見つけることが出来ず、リーダーの方に位置を確認、やっとのことで見ることが出来た。

突然、湖面のマガンの群れが一齐に飛びたつ。オジロワシやオオタカなどが接近して来ると、このように飛びたつのだという。その数の多さ、啼き声、旋回、飛行は見た人にしか理解できない迫力満点のドラマである。

約束の時間がすぎても皆さん方はその場を動かさず。リーダーの時間延長のコールがあり、一団は再び湖面に釘づけで探鳥をする。

次の鏡沼にやっつと移動する。ここでは数種類のカモ類がのんびりと羽根を休めている。見ていると、遠くシベリア大陸から数千kmを飛行してくるこれらの渡り鳥が次の目的地に行く準備のために、静かな休息できる場所を更に多く提供したいものだという思いがした。

私たち人間の範疇で行動するのではなく、自然そのもののなかから、今一度考えてみる時ではないかと。

本日の探鳥会にでかけ強く感じました。また次回探鳥会を楽しみに帰路につきました。一人でも多くの方が探鳥会にでかけられるようにひと声かけてみましょう。

〒005 札幌市南区真駒内緑町2丁目14-10

チュウリス真駒内106

〔記録された鳥〕 宮島沼=カイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ、アオサギ、トビ、オジロワシ、ハイタカ、オオタカ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、スズガモ、ヒバリ、ハクセキレイ、ハシブトガラ、シジュウカラ、メジロ、ニューナイスズメ、スズメ、ムクドリ、シジュウカラガン、カリガネ、ダイサギ 以上30種 10:00~11:45

鏡沼=カイツブリ、トビ、オオタカ、ヒドリガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、キジバト、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ、モズ 以上15種 12:00~12:45

〔参加者〕 草野貞弘、田辺 至、榊川 保・弘子、尾田和雄、霜村耕介、羽田恭子、栗林宏三、山田良造、成澤里美、久田伸一、板田孝弘、須藤昌子、森 茂太・純子・林太郎、樋口孝城・陽子、森田新一郎、清水朋子、佐藤ひろみ、武沢和義・佐知子・あき子、柳沢千代子、吉田

慶子、佐藤幸典、戸津高保・以知子、富川 徹、辻 正一、井上公雄、鈴木昭二 以上33名

〔担当幹事〕 山田良造、富川 徹

探鳥会に参加して

8. 11. 10 松原綾子

毎年この時期になると新聞、テレビ等では渡り鳥のニュースが流れています。私も最近、ハクチョウの群れが空を飛んでいるのを見て「ラッキー！なんか得したな。」と一人喜んでいました。

そんな時、11月10日にウトナイ湖の探鳥会があるとのこと。父と母は前日から探鳥会に参加するといって、ルンルンしていました。そんな父と母を横目に、私の予定はというと……うーん、何もナシ。さびしい……。

そこへ母の一声、「探鳥会、一緒に行く？」私の素直に「はい、お供させていただきます。」こうして親子3人はウトナイ湖へ向け出発しました。

車を走らせること1時間、湖に到着するともうすでに何人もの人が来ていて、ハクチョウやカモ達と戯れていました。私たちが湖のそばへ近づくと、いるいる！数えきれない程のハクチョウ達。子供たちがスナック菓子を与えていました。お菓子のあところへ群れる鳥たち。「失敗した。私もお菓子を持って来れば良かった。」思わず呟く。まったく、後悔先に立たずです。お菓子のことは諦めて湖に目を向けると、コハクチョウ、オオハクチョウ、ピンクの口ばしにコブのあるコブハクチョウ、真っ白い羽がとてもきれいでした。それに毛がまだグレーの幼鳥もいて、親子で泳ぐ姿はとてもかわいかったです。

集合の声がかかりました。名札をつけていよいよ探鳥会の始まりです。天気も快晴、気分も上々、どんな鳥達に出会えるか、わくわくしながら歩き出しました。

しばらく歩くと、「アオサギ発見」の声、参加者の方の立派な望遠鏡を覗かせてもらうと小さくではあるがはっきり見ることができました。そのほかオオバン、ベニマシコなど初めて目にするものもいてうれしかったです。

また少し視線を逸らすと、木々の中に梅もどき、マユミの黄色や赤色が初冬の枯木に色を添えてとてもきれいでした。

こうして探鳥会を終えてみると、普段の生活の中で、ちょっと立ち止まって自然の草木や花、動物達に目を向けるといろいろな発見があって、またとても気持ちが和むことがわかりました。本当に楽しい探鳥会でした。

またこのような催しがあれば、ぜひ参加したいと思います。今回、お世話して下さった方々、どうもありがとうございました。

〒069 江別市野幌東町5-13

〔記録された鳥〕 ミミカイツブリ、アカエリカイツブリ、アオサギ、トビ、オジロワシ、ノスリ、コバクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、マガモ、オナガガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、カワアイサ、オオバン、カモメSP、ツグミ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ベニマシコ、スズメ、ハシブトガラス 以上27種

〔参加者〕 清水朋子、小堀煌治、山本 晃、小野盛市、篠原あき、山本あんり、山崎一弘・一輝・雄斗、成澤里美、村田和幸・静穂、沢辺 勝、栗林宏三、高栗 勇、羽田恭子、松原寛直・敏子・綾子、佐藤正秀、山田良造、戸津以知子、大町欽子、森 茂太・純子・林太郎、山本 晃、戸鼻 篤、中正憲佑・弘子、坂井伍一・俊子、板田孝弘、山崎かおり、柳沢信雄、霜村耕介、石橋和子、野坂英三、富田寿一、永島良郎、井上公雄 以上41名

〔担当幹事〕 富田寿一、永島良郎



【野幌森林公園】

平成9年2月9日(日)

雪に埋もれた森林公園では寒さの中でも力強く活動している鳥たちがいます。厳しい自然の中の鳥たちの生活を知ること、鳥への

理解に役立てたいものです。

尚、歩くスキー、カンジキ等が必要です。

集合=午前9時、大沢口駐車場入口

交通=夕鉄バス(文京台通西行き)新さっぽろ駅バスターミナル・12番乗車口

【円山公園】平成9年3月2日(日)

カラ類の囀りも聞かれる様に…留鳥のカラ類に加えキレンジャク、ツグミ、シメ、アトリ、ウツ等も、カワラヒワがそろそろ姿を見せ始めます。エゾリスに出会えるチャンスも期待できる所です。

集合=午前9時、円山公園管理事務所前

交通=地下鉄東西線 円山公園下車 徒歩4分

【ウトナイ湖】平成9年3月30日(日)

この時期がガンカモ類の渡りの最盛期です。湖面や周辺には色々の鳥が集っています。何れも綺麗な羽色をしたものが多く見応え充分です。中でもミコアイサ、ホオジロガモ、ハクチョウは人目をひきつけます。

集合=午前9時40分 ウトナイ湖畔駐車場湖畔側

交通=道南バス(苫小牧行き)新千歳空港発~ウトナイ湖畔駐車場下車

【野幌森林公園】平成9年4月13日(日)

樹々の芽吹きには少し間があり鳥の観察には最も良い時期です。ヤマゲラ、アカゲラ等のドラミングも盛んでさてはクマガラではと色めき起つことも、ウグイス、ア

オジが鳴き始めるのもこの頃から、キバシリが囀るのもこの時期に限ったことで貴重なチャンスです。雪が残っている所もありますので長靴をおすすめします。

集合=午前9時 大沢駐車場入口

交通=(前掲ご参照下さい)

【野幌森林公園を歩きましょう】

平成9年4月6日(日)

集合=午前9時 大沢駐車場入口

交通=(前掲ご参照下さい)

☆交通機関を利用される方は、各自でお確かめ下さい。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具をご持参下さい。

☆何れの探鳥会も余程の悪天候でない限り行います。

☆探鳥会の問い合わせは(011)~851~6364 柳沢宅へ

鳥民だより

◆新年講演会、スライド映写会のお知らせ

日時 平成9年1月11日(土)13時30分~

場所 札幌女性センター

中央区大通西19丁目 地下鉄東西線西18丁目駅下車

講師 小杉和樹氏(利尻島自然情報センター)

演題 「利尻の自然史」

講演に引きつづきスライド映写会を行います。

会費 500円

◆写真展用作品のご用意を

恒例の野鳥写真展を5月・バードウィークを機に開催します。場所、期間など詳細は第107号でお知らせいたします。出展ご希望の方は作品をご用意下さい。

◆平成8年度年会費の納入についてお願い

平成8年度年会費の未納の方は、「払込取扱票」により最寄りの郵便局からお振り込みください。

郵便振替 No.02710-5-18287

◆平成9年度の探鳥会ご案内について

本号では4月の野幌森林公園探鳥会と「歩きましょう」を掲載しました。以後の詳細は次号でお知らせします。

お詫びと訂正

野鳥だより第105号、平井さち子氏の写真説明が「めおとキジ」を「めおとシギ」と誤っており、謹んでお詫びいたしますと共に、訂正いたします。

なお、写真右下の草のなかにメスがありますが、不鮮明でおわかりにくかったと思います。念のため申し添えます。(編集部)

会 員 名 簿 (追補)

(平成8年12月4日現在)

[新しく会員になられた方]

川 島 恵和子	897-1233	004	札幌市厚別区もみじ台南6丁目8-12
歌 代 成 子		004	札幌市厚別区厚別東4条8丁目9-20
渡 邊 智 子	786-3934	065	札幌市東区伏古8条4丁目4-12 リーベスト伏古202
松田進・春江	614-3475	063	札幌市西区山の手1条1丁目3-25-405
山 下 茂	01454 2-3367	054	勇払郡鶴川町文京町1-11-10
館 雅 之	532-2480	064	札幌市中央区南6条西26丁目 ラフォーレ円山公園301号
有 澤 浩		079-15	富良野市山部町東20-7

[家族会員となられた方]

○印は従来、個人会員として加入されていた方

○野 口 正 男・○き よ			
○永 島 良 郎・トキ江			
相 木 大 嗣・○孝 子			
○吉 田 司・○行 子			
○新 妻 博・登貴子			
○浪 田 良 三・典 子			
○徳 光 誠・幸 子			
岡 田 実・江 里		004	札幌市厚別区厚別北3条5丁目7-3 ☎896-8566
鈴 木 倫太郎・みどり		005	札幌市南区石山1条2丁目8-8-210 ☎592-6265
那央・森太郎・岳二郎			

[住 所 変 更 等]

本 橋 孝 之		006	札幌市手稲区稲穂1条1丁目363-1 サーム手稲参番館805号
新 城 久		001	札幌市北区北27条西12丁目6-7-12号46
佐 藤 康 雄	0123 21-3900	069-11	千歳市東丘824-30
須 藤 昌 三	0425 92-5348	191	東京都日野市百草269-2 タカラハイツ百草304
大 浦 美佐子		270-13	千葉県印西市小林浅間1-10-8
石 井 正 司	0136 73-2291	048-01	寿都郡黒松内町字大成37
神 田 健 男		046	余市郡余市町黒川町467-6
霜 村 耕 一		065	札幌市東区北16条東6丁目2-9 ラポール美香保A601
三 船 喜 克	695-2416	006	札幌市手稲区前田7条7丁目2-9
幸 子			
数 田 真 弓	726-3294	001	札幌市北区北14条西2丁目4 メルバN14-303
松 田 賢 二		057	浦河郡浦河町東町かしわ3丁目4-1

[北海道野鳥愛護会] 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287
☎060 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465